

英語科教育における言語とコミュニケーションをめぐるパラダイムシフト

—身体論的視点による脱・脳中心主義—

実施教科・分野	英語科・コミュニケーション
指導学年・組	福岡教育大学附属福岡中学校3年2組
授業者	吉武 正樹
実施日時	平成23年11月9日(水)6時間目(14:40~15:30)

1. 「頭でっかち」の英語教育

「外国語教育」としての英語教育において、「英語」はその発端からしてすでに対象化されている。理論的にも *target language* と呼ばれ、主語は「生徒」、動詞は「学習する」、そして「英語」はその目的語となっている。一体化した「言語—文化—認識」がコミュニケーションを通じて習得される母語とは異なり、すでに母語が血肉化してしまった後に新しい意味システムを学習者に教え込む外国語教育では、とにかく「シャワー」のように英語を浴びせれば自然と身につくという前提が成立しない。したがって、言語習得における同時的な過程をあえて細分化し、順に教えて定着を図ることになる。つまり、言語規則をできるだけ単純化した文法を学習し、コミュニケーション活動によってその知識を使う訓練する、「規則→使用」という順序の学習が一般的となる。

以上のような『規則』を学んでそれを『使える』ようにする英語教育は常識的であり、理にかなったものである。しかし、コミュニケーション学的見地、つまりコミュニケーションを人間のあらゆる認識や行為の中心に据えて考察する立場からすると、このような言語習得はひとつの解釈にすぎず、その解釈を常識として固定してしまうがゆえに、言語習得の本質的な部分が抜け落ちてしまう、さらには、本質と非本質が逆転してしまう事態が見て取れるように思われる。

例えば、英語のコミュニケーション能力向上の取り組みに関して現場や教育委員会では「生徒たちは英語を話すことに自信がなく、それは英語の基礎力や応用力が不足しているからだ」と分析し、「どのように基礎力や応用力を高めさせるか」という問いの立て方をする。確かに、「規則→使用」の論理に沿って、規則の基礎を徹底して身につけ、使う練習をつめば自信がつき、英語を話そうとすることもあろう。だが、生徒たちにとって英語はそもそも「外国語」であり、それゆえ間違った英語を使ったり、聞き取れなかったり、通じなかったりする恒常的なリスクを完全に払拭することはできない。厳密に言えば、「知識が不足しているから自信がなく、コミュニケーションをとらない」ため「英語力をさらに向上させる」というメッセージ自体が、逆説的に、「正しい知識を有していないので自信がなく、コミュニケーションできない」というリアリティを強化させるのではないか。つまり、確実な英語力を必要以上に強調することが自信のなさに拍車をかけ、余計にコミュニケーションできないという精神構造を再生産しているのではないか。

語弊を承知で言えば、「規則→使用」を前提とした常識的な英語教育のパラダイムは過剰な規則への固執がゆえに「頭でっかち」の状態になりがちである。英語のコミュニケーション状況を前に自信を失いたじろいでいる「頭でっかち」の生徒たちは「居着き」(内田、2007)の状態にある。「居着き」とは武道の用語であり、「足裏が床にはりついて身動きならない状態を指す。一般的には、心理的なストレスが原因で身体能力が極度に低下することを意味する」(p. 115; 傍点は

授業者)。「中枢=頭」と「末端=身体」の関係において「中枢→末端」へと指令が伝達される際、「過度の気遣いが不安を昂進させ、結果的に運度能力を低下させ、生命身体の危険がいつそう高まる。この悪循環が『居着き』の構造である」(p. 116; 傍点は授業者)。つまり、脳内の情報処理に過剰に依存する脳中心主義的思考のために、生徒たちはコミュニケーションという身体を巻き込んだ実践の場において逆に「居着い」てしまうのである。この場合、英語教育や英語コミュニケーションの実践から欠如しているのは「中枢=頭」へのさらなる依拠ではなく、「身体」という「コミュニケーションの現場」への配慮の方なのである。今、脳中心主義を前提にした英語教育から身体論にもとづく英語教育へのパラダイムシフトが求められているといえよう。

2. 授業内容・形式

本時の授業実践は、すでに約3年間英語を学習してきた中学3年生に対し、「規則→使用」にもとづいた従来の英語観・コミュニケーション観を否定するのではなく、それらをより本質的な形で身体論的に再解釈することを目標としている。具体的な講義主旨は、身体に密着している「鎧」という比喻を用いて次のように表現できる¹：

日本語による日常生活で私たちは日本語の「鎧」をまとっている。英語には英語の「鎧」(英語的な身体の使い方、発想の仕方、コミュニケーションの構えや作法)があり、英語学習とは英語の「鎧」をなじませることである。しかし、日本語の「鎧」を着たまま英語の「鎧」を着るのは難しく、英語を学ぶ際には日本語の「鎧」を脱いで、英語の「鎧」を身体になじませると英語学習が効率的になる。

大まかな講義内容は以下のとおりである。

授業題目：「英語モード」のススメー英語的身体・発想・コミュニケーションー

0. はじめにー英語学習のコツは「英語モード」を体得することであるー

1. 英語的「身体」

1. 1. 胸式呼吸と腹式呼吸

1. 2. モーラとシラブル

1. 3. 横揺れ系と縦揺れ系

2. 英語的「発想」

2. 1. 「助詞」による意味決定と「語順」による意味決定

2. 2. 「(S)・・・V型」と「SV・・・型」

3. 英語的「コミュニケーション」²

3. 1. 家ベースと個ベース

3. 2. 共感ベースと説得ベース

4. まとめー日本語の「鎧」を脱ぎ、英語の「鎧」を着てみよう

¹ ただし、比喩的表現を用いているため、「日本語の『鎧』を脱いで」のように概念的に正確でない表現含む。

² 「英語的『コミュニケーション』」については時間内に講義できなかったため、後日講義調で書いた資料を別途作成し、生徒に配布してもらうよう依頼した。

授業形式としては、英語学習において英語が持つ身体性が鍵であることを了解してもらうために、講義内容を実際に練習し実体感させながら講義を進めた。授業は終始和やかな雰囲気で行われ、ほとんどの生徒が最初から最後までまっすぐに授業者を見て、集中して受講していた。実際に発音し、リズムを取る練習では、中学生らしく特にためらくことなく大きな声でかつ積極的に取り組んでいた。特に、ある単語がいくつかのシラブルで構成されているかを問うたとき、何人かの生徒がさっそく辞書を取りだし、熱心に調べていた様が印象的であった。

本論考をまとめるにあたり、事後的にアンケートを行い、分析資料とした。アンケート項目は、(1) 授業内容は理解できたか、(2) 英語は好きか (それはなぜか)、(3) 英語に対して抱いているイメージ、(4) 授業をもとに「英語を学ぶこと」についてどのように考えたか、である³。

授業者は研究方法において、対話的なインタビューを重視し、そこから現象学的に事柄の本質的テーマや条件を取り出す解釈的研究を行ってきた。今回のアンケートは取り出す情報量に限りがあるが、同様の分析方法を採用した。参考のためにデータの平均やパーセンテージなどの最低限の記述統計を提示するが、本稿が予測や仮説検証を目的としないため推論統計分析は行わない。以下、アンケート結果を分析し、生徒の現状や講義による意識変容について明らかにする。

3. アンケート結果の分析

分析をはじめめる前に、授業内容がどの程度生徒に理解されたかを確認しておく。授業内容の理解度を問う質問（「授業の内容は理解できましたか」→1. 理解できた 2. ほぼ理解できた 3. どちらともいえない 4. あまり理解できなかった 5. 理解できなかった）において、生徒の全体平均は1.73（「3.」2名、「4.」1名、残りは「1.」「2.」）であり、全体的に概ね理解できていたことが見て取れる。以下(1) 英語に対する好き嫌い、(2) 英語に対するイメージ分析による生徒たちの英語の捉え方を、アンケート結果をもとに理解していく。続けて、受講後に「英語を学ぶこと」について考えたことに関する自由記述に依拠しつつ、(3) 生徒たちの身体論的パラダイムの受け止め方や効果を分析する。

3. 1. 英語に対する好き嫌い—身体論による脱・脳中心主義の可能性—

Krashen & Terrell (1983) が提唱した Natural Approach の仮説の一つに情意フィルター仮説 (Affective Filter Hypothesis) がある。この仮説によると、第二言語習得において学習への不安など「情意フィルター」という心理的障壁が高いと、インプットが効率的に学習者に届かず、習得が阻害される。身体を英語モードに開放することは、言い換えれば、英語に対する「ガードを下げる」ことである。英語が好きか嫌いかという情意面の特徴は、英語学習に対して学習者が抱く情意フィルターの高さを理解する一つの指標といえる。ここではまず、生徒の英語の好き嫌いに関する現状を把握し、さらにその理由を分析することでその「壁」の特徴を理解する。

「英語は好きか」という問いに対し、「1 = とても好き」とした5段階評価で返答してもらった。表1が示すように、全体の平均は2.88であり、「好き」にやや傾いた結果であった。分散としては、「3」を分岐点に「好き」・「嫌い」が14名(41.2%) ずつに分かれ、「1」が5名に対して「5」は1名であり、この「1」の層が平均点を若干「好き」の方へ傾けている。男女別の平均はそれぞれ男子3.07、女子2.74であり、多少女子の方が英語を好む傾向がある(表2)。男子の場合、

³ 分析には直接関係ないが、最後に、授業を受けて、聞きたいことがあれば書いてもらう箇所を設けた。

中間の「3. どちらでもない」を選ぶ数が少なく、二極化の兆候を示す一方、女子は「3」が26.3%を占め、「1」の3名、「2」の5名が平均を男子よりもやや「好き」の方に押し上げている。

以上、本授業の生徒は平均的にやや英語が「好き」に傾いてはいるが、英語が好きな生徒と英語が嫌いな生徒は緩やかに分散していることがわかった。では、英語が好きな生徒と嫌いな生徒はどのような理由でそう感じているのか、それぞれの「リアリティ」を理由の記述から分析する。

表1：「英語は好きですか」（全体）

全体平均 (34名)	2.88				
好き嫌い	1	2	3	4	5
人数	5	9	6	13	1
項目別%	14.7	26.5	17.6	38.2	2.9
好き嫌い別%	41.2		17.6	41.2	

表2：「英語は好きですか」（男女別）

男女別平均	男子 (15名) 3.07					女子 (19名) 2.74				
好き嫌い	1	2	3	4	5	1	2	3	4	5
人数	2	4	1	7	1	3	5	5	6	0
項目別%	13.3	26.7	6.7	46.7	6.7	15.8	26.3	26.3	31.6	0.0
好き嫌い別%	40.0		6.7	53.3		42.1		26.3	31.6	

生徒が英語を「嫌い」と感じる理由から見てみたい。まず目に付くのが「暗記に対する難しさ」である。具体的には、単語、綴り、文法、発音の規則全般において、「覚えられない」、「暗記が面倒くさい」と述べている。つまり、「規則→使用」にもとづいた英語教育では、使う前に規則を覚えることが出発点となっているため、彼（女）らはすでにその入口のところで英語に対する抵抗感を抱いていることになる。さらに、入口で躓いた生徒たちは、当然のごとく英語の「使用」においても困難に直面し、そのことを嫌いな理由に挙げている（例えば、「長文が難しく大変だから」、「リスニングが分からない」、「一度ひっかかるとやる気をなくす」、「理解するのに苦労する」）。最後に、一名ではあったが、「英語が日本語と異なっており、日本語よりも考えてしまう」ことを理由に挙げ、言語の異質性のためにうまく「鎧」を脱げないもどかしさを吐露している。

まとめると、英語を嫌いな生徒たちは、暗記をはじめ、おそらくは英語の「規則」に難しさを感じ、それゆえ「使用」ができず、それが英語学習への動機を下げているようである。つまり、英語嫌いの生徒たちは「規則→使用」の過程で英語という異質なシステムを内面化し損ね、このことが英語を嫌いと感じさせ、情意フィルターをさらに高めてしまう事態を引き起こしている。

続いて、英語が好きな生徒たちの理由を見てみよう。明らかに目につく理由は、彼（女）らが英語そのものに面白さを感じ、まさにそのために英語を学び使用することに嬉しさを感じていることである。例えば、「英文をつくるのが面白い」、「コミュニケーションを取ることができ、伝わると嬉しいから」、「会話が楽しい」、「リズム感が楽しい」という理由が挙げられている。この生徒たちは英語嫌いの生徒とは異なり、英語という異質なシステムに違和感や抵抗感を抱くのではなく、むしろそれを肯定的な興味へと変換し、好奇心を抱いているのである。特に、「日本語と違

うから楽しい」というように、「違うから嫌い」ではなく、「違うから英語が好き」になる生徒も見られた。このように、英語を好きな生徒たちは英語に対する「ガード」が低く、むしろ「違う」ことを肯定的に受け止め、英語に対峙しているようである。中には、英語を学ぶことに付随する「実用的」な理由を挙げる生徒もいた。例えば、英語を学ぶことで「知らない知識を身につけることができる」し、「インターネットや洋楽や洋画が分かる」から、「視野が広がるから」という理由である。この場合、英語の異質性に対する興味というより、英語がもたらすメリットに関心が向かっており、現在よく耳にする「英語を学ぶと役に立つ」という仕方で「道具的」に動機づけ (instrumental motivation) られている意味で、上記とは異なる理由となっている。

以上、英語の好き嫌いの理由を分析してきたが、その分岐点に英語という異質システムに対する態度の相違がみられた。好意的な生徒の場合、「役に立つ」という実用的理由も助けとなり、英語の異質性を学習の動機に変え、嫌いな生徒は異質性ゆえに英語の身体化に困難を感じる。ここに「身体論的視点による脱・脳中心主義」が有効となる可能性を見出すことができそうである。

3. 2. 英語のイメージ—外在化されたモノとしての便利な道具—

私たちは英語に対して良いイメージから悪いイメージまで、さまざまな価値観を付与している。こうした価値観と英語に対する好き嫌いはどのように関係しているのだろうか。ここでは、生徒たちが持っている英語のイメージを分析し、生徒たちの英語の捉え方をより詳細に理解する。生徒には「英語に対して抱いていた (抱いている) イメージをよく表すことば (日本語) を、3つあげて」もらい、挙げられたイメージをもとに分析した。

結果としては、英語が好きな生徒も嫌いな生徒も英語に対するイメージにおいて、さほど大きな違いが見られなかった。第一に、英語の好き嫌いに関わらず、どちらも「難しい」というイメージを持っている生徒が多くみられた。英語が嫌いと思っている生徒14名のうち9名が「難しい」というイメージを有していた一方、英語が好きな生徒14名のうち6名が同様に「難しい」と答えている。同様に、英語が嫌いな生徒のうち「暗記」をイメージしたのが2名、「勉強」と答えたのが1名いたのに対し、好きな生徒のうち1名がやはり「暗記」と挙げている。常識的には、常識的に「英語が嫌い生徒は英語を『難しい』と感じているために英語を嫌う」と考えてしまうが、実際には、英語が好きな生徒にも同じように「難しい」とイメージしている生徒がおり、彼(女)らの場合には「難しい」というイメージが英語の否定的な捉え方へと向かわず、反対に「それでも英語が好き」というように作用しているのである。つまり、英語を「難しい」と感じることは必ずしも英語が嫌いになる必要条件にはならない。

第二の結果として、英語の好き嫌いを問わず「英語=難しい」というイメージを共有していたように、両者とも英語を比較的「肯定的」なイメージで捉えてもいることも分かった。例えば、英語が嫌いだと感じている生徒が「世界中で使える」、「世界共通」、「国際」、「必要」、「美しい (発音がうまければ)」、「国際的」、「かつこいい」、「明るい感じ」というイメージを持っている一方、英語が好きな生徒にも「自由」、「グローバル」、「世界中で話されている」、「他国とのコミュニケーションの手段の一つ」、「大切」、「世界共通」、「グローバル化」、「話しやすい」、「共通語」、「国際的」、「国際語」、「かつこいい」というイメージを持っていた。数としては英語が好きな生徒の方がより多く肯定的な語を挙げているが、その差は必ずしも大きくない。言いかえれば、英語が好きな生徒も嫌いな生徒も英語に「国際性」を見出し、それゆえに英語学習が大なり小なり「必

要」だと感じ⁴、場合によっては英語自体に「かつこよさ」を見出すのである。

興味深いことに、「3. どちらともいえない」と答えた6名も全員が「難しい」と考えており、英語の好き嫌いに関係なく、「英語が異質な言語である限り簡単に理解できない」という認識がここでも共有されている。そのうえ、この6人のだれもが英語に「国際」的なイメージを見出していない。「3」という「ドライ」な態度が英語に対する「無関心」を意味しているのかもしれない。つまり、「英語は国際共通語だから重要である」という言説が溢れている現在、それに反応する形で「だから、難しいが好き」という生徒と「しかし、難しいから嫌い」という両極に分岐するのに対し、「英語＝国際共通語」というイメージに無関心な生徒はどちらの極にも振れない、と考えることができるのではないか。

以上のような「英語＝国際共通語」というイメージに前提されているのは、「英語＝道具」という言語観である（厳密には言語はモノではないため、「道具」ではなく「道具的」といわねばならない）。では何かが「道具的」であるとはどういうことか。それは、英語を使って達成されるべき目標がその先に設定され、その目標と照らしたときに言語が「道具」という「手段」として表象されるということである。つまり、何かが「道具」とみなされる場合、言語は人間に内在化されたものではなく、人間の外に存在する「モノ」として意味される。このように「人」対「モノ」に乖離した「言語」は、脳という入れ物に収める「対象」でしかない。こうした道具的言語観では、言語は「身体的」なものとしては捉えられておらず、頭に入るように規則化されてはいるが、どのように英語モードを「身体」になじませるかという問いはここからはでてこない。この結果も本授業が目指す「身体論的視点による脱・脳中心主義」を考慮すべきと考える余地を与えていると考えることができよう。

3. 3. 授業の効果—英語学習に対する態度変容—

本授業は『英語モード』のススメ—英語的身体・発想・コミュニケーション—と題して、なぜ英語が簡単に「身につかない」のかという問いと英語が持つ身体・発想・コミュニケーションの特徴を押さえていないためであり、身につけるためのコツとして「鎧」の比喩を使って「日本語の鎧を脱ぎ、英語の鎧を着る」ということを、実際に練習をしながら講義した。分析の最後に、本授業を聞いて、生徒たちが『英語を学ぶこと』についてどのように考えたかを分析する。この設問は自由記述で時間がかかるうえに、日を改めて行ったアンケートであったため十分な回答時間が取れず、記述は限られたが、その中でもいくつか着目すべき点が見て取れた。

一つ目に、英語が好きな生徒よりも、嫌いまたは「どちらでもない」と答えた生徒の方がコメントを書いた率が高く、かつその内容が「前向き」だったことは注目に値する。コメントを書いた22名のうち、英語が好きな生徒は8名、「どちらでもない」の生徒が5名、嫌いな生徒が9名であった。英語が好きでも嫌いでもなく、先に私が「無関心」な層とみなした「3」の生徒を含め、特に英語が好きでない計14名の生徒がコメントを残したことは授業の「手ごたえ」を感じさせた。さらに分析を進めるために、好き嫌い別にコメントを表3にまとめておく（文言は授業

⁴ なぜ英語を勉強するのかと問われたとき、私たちはよく「英語は国際共通語であるから」、「できるとかつこいから」、「将来役に立つから」、「就職に有利だから」と答える。そのように英語を学ぶ意義を語る教師もいるだろう。しかし、生徒たちは既にそのようなイメージを有しているため、英語の国際性や有用性を強調することは決定的な動機づけにはなりにくい。それは英語が難しく嫌いだと思っている生徒でさえ少なからず認識している。

者が必要に応じて修正しており、完全な直接引用ではない。

もちろん、本授業のテーマを生徒が正しく理解することは重要である。しかし、ここでより重視したいのは、英語学習に対する態度の変容である。というのも、「規則→使用」という枠組みで英語を勉強し、特に英語は「難しい」ので「嫌い」だと考える生徒が少しでも「英語が身につくそうだと実感できれば、彼（女）らの今後の学びにおいて「規則」に囚われすぎず、英語モードを身体になじませながらよりスムーズに学習に取り組んでいけるのではないかと考えるからである。このように、第二の特徴として、英語の好き嫌いに対し「3」「4」「5」とつけた英語をあまり好きでない生徒たちにおいて、下線で示した態度変容が見られたことを挙げることで、そのことこそ本授業における何よりも価値ある効果だと考える。

表3：授業後の感想のまとめ（英語の好き嫌い別）

英語が好きな人（「1」「2」を選んでいた生徒）
<ul style="list-style-type: none">・将来役立ちそう・ただ書くだけではだめで、もっと発音してみたりして体を使う方がいい。呼吸の仕方にも関係があったのが驚いた。でも、たくさん単語をつないでいっても[イントネーション]が変わらず一気に読まないといけなないので、意外と大変。自分はまだ英語の発想ができていないので、きちんと語順を覚えて考えていきたい。・小学校の時はクソ食らえだったが、学び始めて文法も理解したら、話すことや聞くことが少しずつ楽しくなってきた。そこで今回の授業を受け、「鎧を着脱」がとても印象に残った。本当にためになった。・今までは単語、文の構成…と勉強していたが、「流れ」が大事だと分かった。・英語を私たちは普段の日常生活で使うのは難しいと決めつけていた。でも先生の授業で、英語は工夫することで吸収しやすくなることがわかった。・「学ぶこと」「勉強」と聞くとどうしても机の上でペンをもってすることを想像してしまうが、英語の授業は音楽で歌うように、リズム感を大切にしながら、とにかく練習あるのみだ。・授業で、英語について、いつもとちがう視点で考えてみると、すごくおもしろいものだ。・「日本語」と完全に切り離して、英語と向き合っていくことが大切なのだ。英語は日本語ほど分の構造が難しくないので、そこまで悩む必要がない。
英語が好き嫌いどちらでもない人（「3」）
<ul style="list-style-type: none">・英語を学ぶときは考えを改めてのぞまないといけない。私はリスニングが苦手だが、最初の方をより注意深く聞くことが大切だとわかった。今まで考えたことはなかったが、文法が違っていると話すだけでなく聞くときにもポイントが変わってくるのだ。・新しい視点から英語を見れるようになった。・英語は「学ぶ」のではなく「身につける」ものだ。・机について黙々とするだけではない！！・英語を学ぶことはこれからとても大切になっていき、学び方を少し変えるだけで英語を面白いと感じることができたり、学びやすくなったりする。今まで難しいため苦手意識をもっていたがそう思う必要もない。
英語が嫌いな人（「4」「5」を選んでいた生徒）
<ul style="list-style-type: none">・英語でコミュニケーションをより多くとることが大事。

- ・楽しんでやればいい。
- ・英語は言葉なので使っていくことが大切だと考えた。
- ・楽しむ。
- ・初心に戻ることができた。
- ・英語を学ぶには日本語の話し方をリセットして考える必要がある。英語を学ぶことはけっこう楽しいかも。
- ・日本語の延長として英語を見ていた自分がとても恥ずかしく思った。英語の脳で英語を学びたい！！
- ・英語と日本語は根本から違うものだ。英語を日本語に直して問題を解いていたので、英語であることを考えなければならない。完全に違うわけではなくて、結局同じ言葉なので努力しようと思った。
- ・英語を日本語をもとに考えるのではなく、英語モードと日本語モードを切り替えると聞いて驚いた。驚いただけでなく、授業でどのようにやるか実践してみると、本当に英語が分かりやすくなり、楽しくなった。これから、自分がより英語を好きに、より得意になるようにこの授業をいかしたい。

4. おわりに—英語教育におけるパラダイムシフト—

本授業における授業者の最大の狙いは、英語教育における「パラダイムシフト」にあった。日本における英語教育が外国語教育である以上、「規則→使用」という順序で教育することにはそれなりの妥当性がある。しかし、このパラダイムに依拠しすぎるために、教師・生徒が「頭でっかち」になり、そのために英語習得やコミュニケーションに困難をきたしていることも事実である。既存のパラダイムに「身体」重視のパラダイムを対峙することで、身体と脳のバランスのとれた英語教育へと読み替える必要がある。脳中心主義から脱し、身体論にもとづいたパラダイムへとシフトするためには、狭義のコミュニケーション観から広義のそれへの変更が鍵となる。

現在主要である「規則→使用」パラダイムにおいて、コミュニケーションとは文法規則を「使用」して「聞く」・「話す」・「読む」・「書く」行為を遂行することである。つまり、「言語の使用そのものがコミュニケーション」と見なされている。こうした「規則→使用＝コミュニケーション」という考え方を「狭義」のコミュニケーション観と呼んでおこう。

さて、コミュニケーション学の見地からいうと、コミュニケーションは言語と「＝」で結ばれる関係に限定されるのではなく、「言語Cコミュニケーション」という「広義」の関係にこそ本質がある。例えば、「つめ」と言うために英語で「nail」と言って伝われば「コミュニケーションは成立した」と普通は考える（狭義）。しかし、仮に nail という単語を知らずとも、自分のつめを指差して示せば十分コミュニケーションできるのではないか。また、英語も日本語も話せない子がホームステイしても、表情などからその子が空腹なのか、トイレに行きたいのかを感じ取ることは十分可能である。極論すれば、原初的なコミュニケーションの成立において言語的規則の使用は十分条件でもなければ必要条件さえなく、言語の使用なくしてもコミュニケーションは成立する。つまり、言語の使用を待たずして、「まずはコミュニケーションありき」なのである。

コミュニケーションを狭義に捉えてしまうと、私たちは過度に言語コミュニケーションに依拠し、英単語を知らない、文章を組み立てられない、相手の言うことが聞き取れないといった場合、自信を失い、コミュニケーションを避けようとしてしまう。つまり、規則の欠如が強調されるがゆえに「居着」いてしまう。「言語は大事だ」と考え、言語によるコミュニケーションを重視した

結果、「不完全」になりがちな英語力に足元をすくわれてしまう結果になりかねない。

こうした「頭でっかち」な狭義のコミュニケーション観から脱するには、「身体」に根を下ろした英語教育を描く必要がある。人は言語を使用せずともコミュニケーションでき、しかし、言語こそがコミュニケーションを深みある行為へと仕立てる。規則の正しい使用に固執すると、定期考査や受験が自己目的化し、「減点方式」の英語教育⁵に陥る。大切なのは、英語が不完全でも「まずはコミュニケーションしてみよう」と現場に飛び込み、最初は50%だった理解が英語の学習が進むごとに言語を駆使することで80%の理解へと仕上げていく「加点方式」の英語教育の発想であり、キラキラと目を輝かせ、生き生きとコミュニケーションし、人生を豊かにしていく生徒像ではないか。こうした能力こそ実は小学校における外国語活動が掲げる「コミュニケーション能力の素地」の原型であり、英語活動から英語教育へと円滑に小中連携を進める土台になる。こうした思考の逆転こそ、英語教育を真の意味で「教育」たらしめるのではないだろうか。

引用文献

内田樹 (2007) 『私の身体は頭がいい』 文芸春秋。

Krashen, S. & Terrell, T. D. (1983). *The natural approach: Language acquisition in the classroom*. Oxford, Pergamon.

⁵ むろん、習得の度合いを評価するための数値化は必要である。しかし、数値化(試験)が自己目的化し、コミュニケーションが言語の使用に矮小化され、「正解」を基準とする減点方式の英語教育に陥ってしまうと、言語規則に絡みとられた「頭でっかち」のコミュニケーションは「居着」いてしまう。そもそも、受験と広義のコミュニケーション観は矛盾せず、共存しえる。つまり、英語モードの身体性を重視した日々の授業によって着実に実力がつけば、それ自体が「受験対策」になりえるからである。そこでも確実性を高める文法指導も重要であるが、それが広義のコミュニケーション観に支えられた加点方式の英語教育である限り、コミュニケーションはジャズセッションやテニスのラリーのように、身体と身体の間で展開する運動となり、規則としての言語が(音楽の知識やスポーツ理論のように)コミュニケーションの質をよりよいものに仕立てる、という本質からは逸脱しない。